近代文学研究叢書

第六巻

昭和32年5月10日　印刷
昭和32年5月20日　発行
昭和47年3月1日　二刷出版

〔¥2500〕

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　東京都世田谷区太子堂一～七　小林寅次

印刷者　東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地　梶原忠幸

発行所　東京都世田谷区太子堂一～七　昭和女子大学近代文化研究所
振替口座東京一七〇八六七
電話(422)五一三一～八番

近代文学研究叢書

第

六

巻

昭和女子大学

近代文学研究室

監修

池田亀鑑（国文学）
石森延男（児童文学）
上井磯吉（英語学）
荻原井泉水（俳文学）
太田三郎（比較文学）
片桐顯智（和歌文学）
金子健二（英文学）
木俣修（和歌文学）
坂本由五郎（英文学）
笹澤美明（独文学）
山宮允（英文学）
島田謹二（比較文学）
玉井幸助（国文学）
辻村鑑（英文学）
内藤濯（仏文学）
成瀬正勝（近代文学）
人見圓吉（近代文学）
保坂都（国文学）
本間久雄（近代文学）

口絵写真

中島歌子　高山樗牛　正岡子規　西村茂樹　中島湘煙

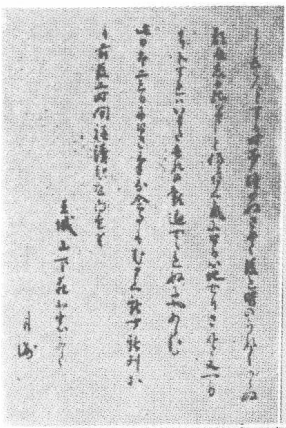
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中島湘煙

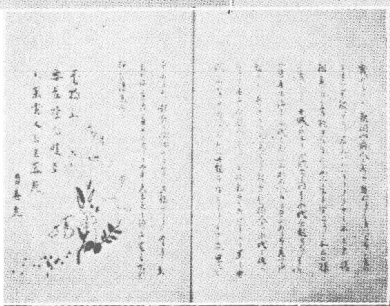
自筆日記の一部
（明治三十四年五月十七日）

自筆日記（冊之五の表紙）
（岸田義雄氏蔵）

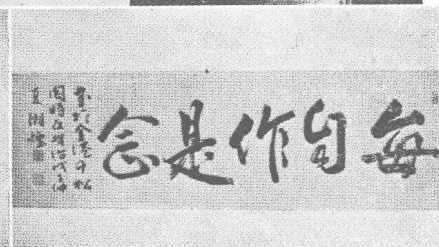
イタリー公使夫人として伊在中の湘煙
明治二十六年（岸田義雄氏蔵）

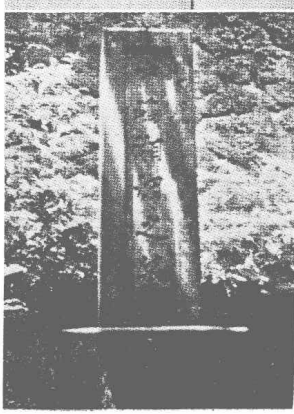


自筆の書・明治二十一年頃の作か？
（岸田義雄氏蔵）↓



自筆日記の一部
（明治三十四年四月十五日）





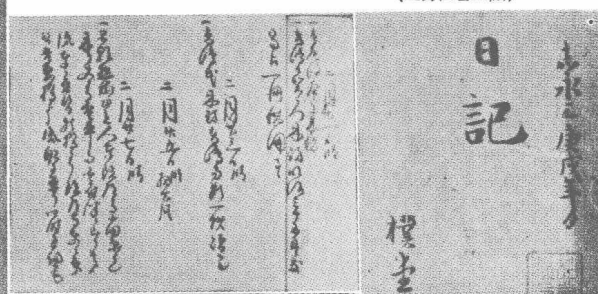
神奈川県大磯、大運寺境内にある湘煙の墓

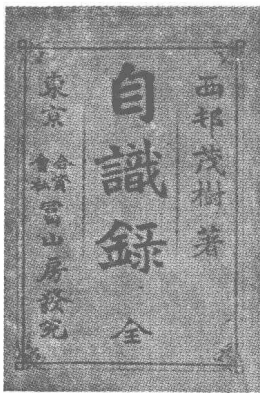
「湘煙日記」石川栄司、藤生てい共編
明治三十六年三月刊（昭和女子大学蔵）

宮廷出仕の頃の姿——明治十二——四年（岸田義雄氏蔵）

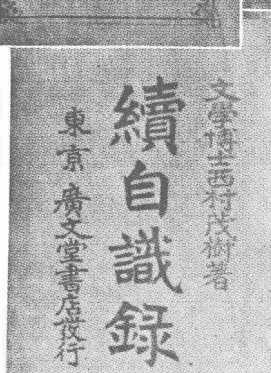
西村茂樹

自筆日記の表紙とその一部——歿年である三十五年　後の日記
（上野図書館蔵）



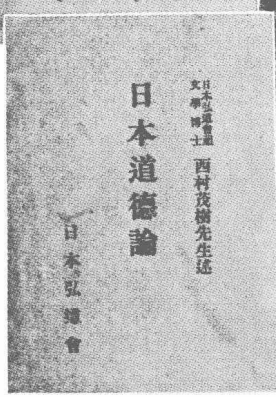


「自識録」——明治三十三年八月刊（本学蔵）

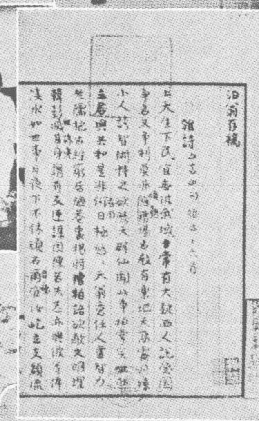


「続自識録」——明治三十五年三月刊（本学蔵）

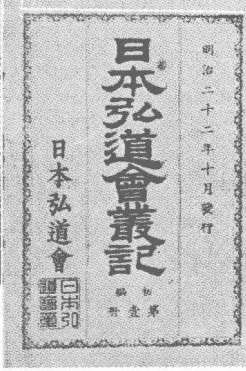
上　中条氏一家（大正年間）
左から精一郎、萩江（茂樹次女）寿美子，国男の諸氏
下　佐野城跡（栃木県佐野市所在）茂樹撰文の碑



「日本道徳論」——大正二年九月刊（中条国男氏蔵）



「泊翁存稿」草稿の初頁（上野図書館蔵）



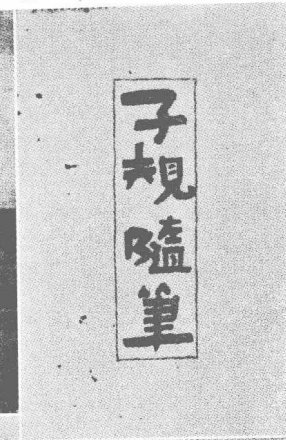
「日本弘道会叢記」——「弘道館雑誌」の改題第一号——明治二十二年十月刊（昭和女子大学蔵）

正岡子規 (1)

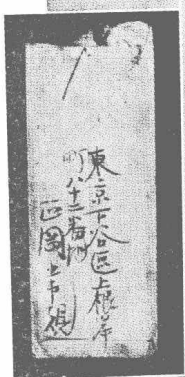
「続子規随筆」—大正三年八月刊
（昭和女子大学蔵）

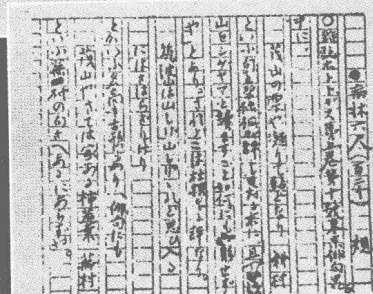
晩年の子規

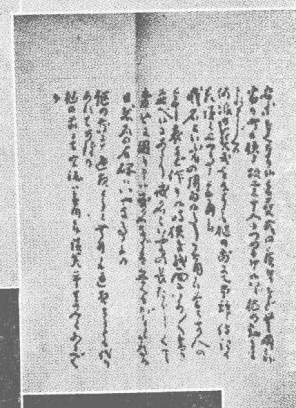
子規随筆—大正三年四月刊・下の左右二つはこの書の内容の一部（昭和女子大学蔵）

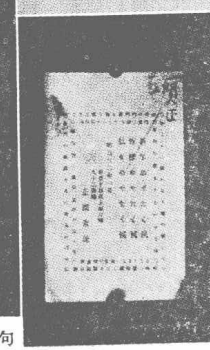


子規書簡の封筒裏面 ↓







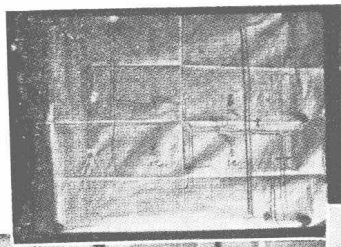


子規年賀状—明治三十二年。中央に賀詞、その周囲には天地左右に二句宛細かい文字で俳句が印刷してある。（内藤剛彦氏蔵）

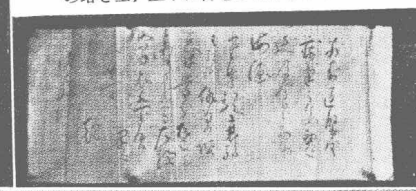
句碑——明治二十八年一宿和尚を訪ねた時の子規の句　松山市正宗寺境内

正岡子規 (2)

田端附近略図—内藤世南氏に与えたもの，左上に五重の塔と墓，左下に自宅の黒印しがある

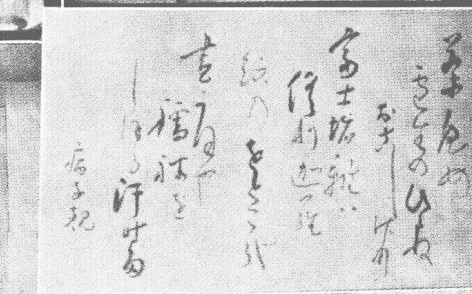


子規庵句会における子規の句稿（内藤剛彦氏蔵）

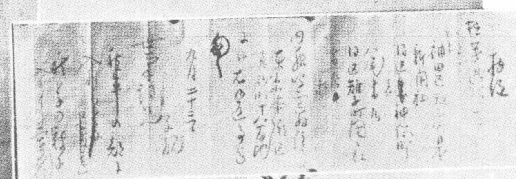


子規書簡（内藤世南氏宛）（内藤剛彦氏蔵）

子規筆俳句（内藤剛彦氏蔵）



子規書簡（内藤世南氏宛）（内藤剛彦氏蔵）



松山市、子規堂の子規碑

子規遺稿 第一篇 子規小品文集

此書は子規子の小品文をもとして寫生文集なり寫生文は俳句と共に子規子始創の新体にして其の文は俳句と共に子規子の下に於ける一種の文学にして其人の熱想せる處なれば敢て云はず。

「子規小品文集」—明治三十八年十一月刊（昭和女子大学蔵）

松山市，中の川畔にある子規旧居跡の碑

高山樗牛 (1)

樗牛追悼会プログラム—明治三十六年一月二十四日　神田区青年会館
（工藤恒治氏蔵）

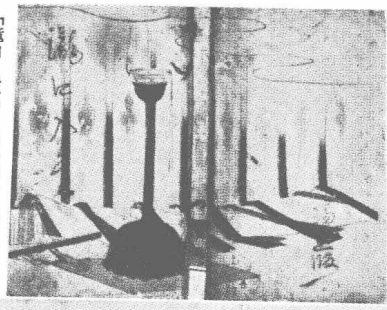
樗牛の墓、銅像は朝倉文夫氏作
（清水市竜華寺境内）

樗牛の筆跡—実父宛の証文
（工藤恒治氏蔵）

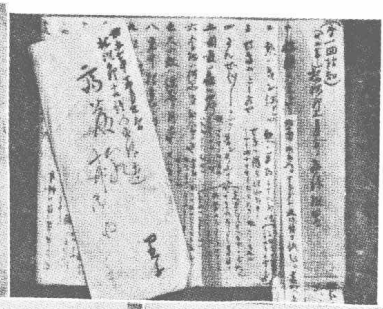
養母。その右は「人生の価値及厭世主義」帝国文学
明治二十八年六月号所載の論文　（昭和女子大学蔵）

養家　鶴岡市新士町・高山家

「近松巣林子が人生観」—帝国文学
明治二十八年二月号所載の論文
（昭和女子大学蔵）



「滝口入道」—明治二十八年九月刊（昭和女子大学蔵）



樗牛病状概略—明治三十五年十二月二十三日に妻里子から実父親信に宛てた書簡（工藤恒治氏蔵）

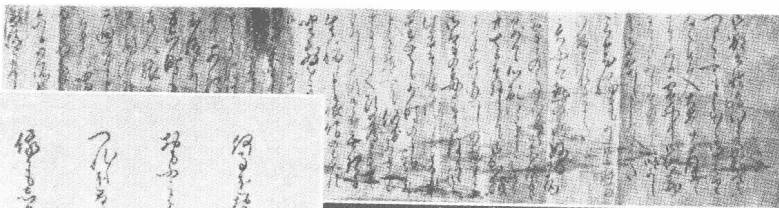
右から「世界文明史」「近世美学」「論理学」（昭和女子大学蔵）

樗牛の生家—鶴岡市高畑町斎藤家

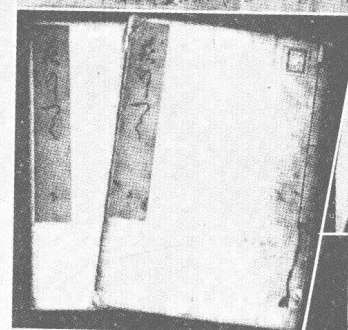
「菅公伝」—明治三十三年四月刊（昭和女子大学蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中島歌子



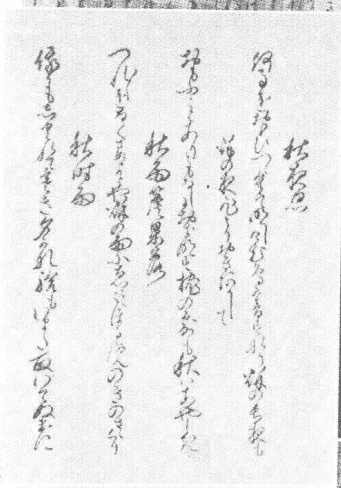
三宅花圃宛歌子の書簡（三宅美代子氏蔵）



歌子の肖像

歌子筆の短冊（中島あい子蔵）

歌子記念碑（文京区仲町、牛天神境内）



「萩のしつく」上下―明治四十一年五月刊（上野図書館蔵）
上は同書上の本文、下は同上歌子自筆の歌

上　萩の舎記念写真、中列向って左から五人目が歌子
下　中島家の墓で、左端が歌子の墓
（東京都台東区谷中墓地所在）

目次

口　絵
第六巻の成立……昭和女子大学　近代文学研究室…（一三）
凡　例……昭和女子大学　編　集　室…（一五）
中島湘煙……（一七）
西村茂樹……（七三）
正岡子規……（一三三）
高山樗牛……（二七一）
中島歌子……（三六七）

第六巻の成立

本巻は明治三十五年五月から同三十六年一月の間に逝去した左記五人の研究と調査を収めることとなった。

中島湘煙は、満十五歳で昭憲皇后に和漢書を進講した当時の才女で、民権運動に参加、各地で政談、女権伸張の演説等を試み、ついに入獄までした行動派でもあった。衆議院初代議長中島信之と結婚後は家庭経済に手腕をふるい巨富をもたらした。小説や漢詩の創作と大部の日記は好個の資料であり、又人間湘煙の面目躍如たるものがある。開化期明治の時代と風潮が生んだ特異の才媛で、かつ女性社会運動の先駆者でもあった。

西村茂樹は、その仕える佐倉藩を通じて倒壊寸前の幕府のため建言斡旋するところ多かった。四十二、三歳までの彼は自藩と幕府のため、大にしては富国強兵、小にしては藩政改革、治水運漕開発等の実務に尽瘁した。若くして儒蘭英の学を習得、西欧文化との交流によらなければ諸外国に伍して行かれないことを悟り、防海、経済、歴史等の翻訳書を著わした。又森有禮の明六社の啓蒙運動に従い、文部官吏としては教育行政、教科書の制定、修身教授指針の確立等、数多くの業績をのこした。中でも、日本弘道会を創立して、自ら陣頭に立ち、固有文化の再認識、国民道徳の興隆を目途とする国民運動をくりひろげ、欧米の形骸模倣に狂奔する国

民の背骨となった。その他彼の多角的な業績は国字、文章改良論にも及び、言海、古事類苑なども彼の発議と慫慂によって生まれたものである。

正岡子規は、伝統の末ついに宗匠の遊芸にまで堕した明治初期の俳諧、和歌を改革して高度の文学に昇華せしめた近代文芸上の巨星で、死の床にいたるまで理論と実作を以て旧派の勢力を粉砕しつづけ、写生主義をかかげ、近代リアリズムの段階にまで国民詩を高めたのであった。その主義、作風を奉ずる系列は今なお繁栄をきそい、更に子規を起点として、種々の新しい傾向を生じ、他の文芸分野との交流も深く、俳句、短歌の世界は依然として隆昌の一途をたどっている。俳諧史上の彼は芭蕉、蕪村につぐ文字通りの画期的な高峰である。

高山樗牛は、その高邁な美的精神と格調高い名文を以て一世を風靡した天才的評論家であり思想家であった。学生時代すでに近松研究で名をなし、小説「瀧口入道」で声価を高めた。太陽、帝国文学を拠点として数多くの評論を発表した。日清戦争後は熱烈な国家主義者として日本主義や国民文学を提唱し、ニーチェの死が伝えられるやこれに傾倒して、美的生活論を草し論壇に衝撃を与えた。この反俗精神と本能満足主義はやがて来る浪漫主義、自然主義にも影響をもたらした。更に彼はニーチェ的人格者として平清盛、日蓮の研究へと進むなど思想の一貫性に欠くところはあっても、その西欧的な教養と多感流麗な文章力は異常な魅力と迫力をもって、当時の読書層に迎えられた。彼の名作「わが袖の記」、「平家雑感」などは前記「瀧口入道」とともに人口に膾炙し、長く愛誦された。

中島歌子は、国事多難の中に水戸藩士林忠左衛門に嫁し、東奔西走、席のあたたまることの少ない夫との生

活もわずか五年で、夫が獄死するという志士の妻としての貞烈数奇の運命をたどり、その後終生独身で、萩の舎塾を開き、古典と和歌の指導にあたり、多くの上流女性を薫陶した。若いときから和歌をつくり、民間の桂園派歌人として地味で堅実な詠みぶりを示している。門下から周知の如く樋口一葉、三宅花圃などすぐれた作家を出した。これらの弟子とは特に人間的に深くつながるものがあって、中島歌子の、指導者としての価値について大いに検討すべきものがあろう。（昭和三十二年五月十日　昭和女子大学近代文学研究室）

凡例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで凡そ二十二年を要しているので、指導者中で、岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑の三先生は既に鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこびになるであろう。謹んで霊前に献呈する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で、著作というのは発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献をさすのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中で編集ものは、所要の小題を書題名欄に、書名

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com